

障害児者の地域生活支援

—「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の取り組み—

今野和夫

A Network of Social Support for Community Life of Persons with Disabilities

Kazuo KONNO

We established a network of social support for persons with disabilities in march 1997. The network has about one hundred and twenty members now. It is constituted by the members who have a variety of position, such as teachers of a school for childs with mental retardation, staffs of institutions for persons with disabilities, persons with disabilities, their families. The main activities of the network are workshop, lecture meeting, and trip.

In this paper, I reviewed the history of the network. The meanings of the network were considered. As a meaning of the network, the possibility to enlarge two way support among members in community was stressed. Furthermore, future directions of the network were suggested.

I はじめに

今日、ノーマライゼーションの理念が普及しつつあり、障害者福祉においても、「個人が人としての尊厳をもって、家庭や地域の中でその人らしい自立した生活が送れるように支えること」(社会福祉基礎構造改革について：中間まとめ。1998年)、すなわち地域生活支援の充実・発展が大きな課題となっている。

現在それは、フォーマルなレベル(公的ないし専門組織による支援)とインフォーマルなレベル(民間ないし非専門的組織や個人による支援。ボランティア活動やセルフヘルプグループを含む。)の双方において様々な形で展開されつつあるが、障害者の生活や人間関係に関する実態調査の結果や、障害者の人権を無視した事件が相も変わらず起きていることから、障害者が地域のかけがえのない一員としてその一日、一週間、一年、ひいては一生涯の各時期をふつうに生活できる状況⁽¹⁾には未だほど遠いことが示唆される。

一方、最近、地域生活支援の充実・発展にとり有効かつ必要な方策の一つとして、「ネットワーク」が注目されている⁽²⁾⁽³⁾。そして現に、同種や異種の組織間、あるいは同じ立場や異なる立場の個人間で様々な形態や内容

のネットワークが設立され、運営がなされつつある。タクシーによる通院や買い物、散策などの外出をサポートする「秋田おでかけ支援ネット」⁽⁴⁾のようにNPOとして立ち上げているネットワーク(2000年1月に県より認証)や、生活支援センターなど種々の機関で地域生活支援に従事する人たちの呼びかけにより1999年6月に発足した「全国地域生活支援ネットワーク」のように、一つの県や市などの特定地域内に限定されない広範囲のネットワークも作られつつある。ちなみに後者の広範囲のネットワークには、インターネットやテレビ電話などの情報通信システムを利用したものもある⁽⁵⁾。

筆者は賛同者とともに、入会資格が緩やかな「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」を1997年3月に発足させた。平成12年12月現在で130名ほどの会員を有するこのネットワークの大きな特徴は、障害者本人も含めて、専門家・非専門家を問わず多様な立場の人たちで構成されているということである。

本研究では、このネットワークについて、発足経緯を含むこれまでの歩みを明らかにし、さらに今後の課題を考察したい。また文中では、このネットワークに関わる人たちの思い(ネットワークへの期待等)やこのネットワークの意義にも言及したい。

ネットワークの重要性や有効性が指摘され、外出支援

など実際の・直接的な活動の他に、情報の収集と提供、人権に関するものなど特定問題の解決、行政への提言、社会啓発といった種々の実践が積み重ねられつつあるものの、ネットワークの意義や可能性、またそのありかたについての研究（実証的研究を含む）はきわめて遅れている。「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」を事例とする本研究は、障害者の地域生活支援を主目的とするネットワークについての今後の研究の端緒をなすものと言えよう。

II 「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の発足まで

1. 「地域支援を考える集い」の開催（1996年8月30日）

筆者は、別の論文⁶⁾で秋田県の支援活動の遅れを指摘し、ボランティア団体や親の会など地域レベルの各種組織間による「障害者の生活支援連絡協議会（仮称）」の設立を提起した。その後、その設立への一步を踏み出すべく、すでに様々な立場で支援活動を行っている知人たちに参加を呼びかけて、それぞれの日頃の実践と思いを交流し合う機会を設けた。

参加者は30名であり、その内訳は、養護学校や障害児学級の教員が4名、知的障害者更生施設職員が4名、大学や短期大学の教員が5名、県（中央児童相談所、職業訓練センター）や市（社会福祉課）の職員が4名、障害児をもつ母親が9名、知的障害者通所施設（福祉作業所）所長、難聴幼児通園施設職員、通園施設のボランティアであった。母親の多くは、それぞれが属する親の会において、積極的な役割を担っている人である。教員や各種職員の多くも、親やボランティアが主宰する地域的活動の一翼を担っている。ちなみに筆者も、様々な障害の子どもたち、その家族、学生ボランティア、養護学校教諭などから成る「秋田すずめの会」⁷⁾⁶⁾に、1985年の発足時より関わっている。

一人一人の参加者の話を聞くうちに「考える集い」の開催予定時間（3時間）はまたたくまに経過した。最後に、とにかく横のつながりを大切にしたい何らかの組織を作ることと、今回出された意見を参考にして組織のイメージ（名称も含めて）をはっきりさせていくための世話人会を作ることが全員一致で了承され、著者を含む世話人（11名）が自選他薦で選出された。以下には、この集いで出された意見がいくつか記されている。

*「地域支援を考える集い」（1996年8月30日）で出された意見

・「施設福祉」から「地域福祉」へと変動しつつあり、知的障害者についても、全国的には在宅者の比率が施設入所者のそ

れを上回っている。しかし、秋田県では、施設入所者が相対的に多く、地域支援や在宅支援が遅れている。「レスパイト」などのサービスを出費して利用する時代に入ってきているが、保護者にはかなりの抵抗があるようである。（更生施設職員。月に1度、同僚や地域のボランティアに呼びかけて、レスパイトを県社会福祉会館で主宰）

- ・生まれ育ってきた地域の中で教育を受ける機会や、多くの友達やボランティアと楽しく過ごせる機会を、これからもできるだけ長い期間にわたって、我が子に与えていきたい。行政による福祉的サービスを利用する際の不便さ・不自由さを、例えば療育手帳を利用しやすい大きさに変えてもらうといった小さいことからでもいいから、少しずつ解消できたらよい。（中学生をもつ母親。親の会のリーダー）
- ・地域の中で障害のある子どもやその家族がどのような生活を送っているのか、教師はあまりわかっていないような気がする。（肢体不自由児学級の担任）
- ・家族の不和や崩壊、家族による子どもの虐待など、深刻な問題を抱えた家族がいる。孤独な親が多い。子どもが学校を卒業すると、親がさらに孤独になる。地域支援では、親同士の仲間作りも大きな課題では。（養護学校教諭。訪問教育担当）
- ・床屋、レストランなど、地域の中のどこを利用するにしても大変。これからはもっともっとたくさんの壁にぶつかるだろう。子どもの障害にもよるが、少しでも明るい見通しをもって、また安心して我が子を地域に出せるにはどうしたらいいか。（自閉症児をもつ母親）
- ・20歳の自閉症児をもつが、小さいときからいろいろな人に、施設に行くのが当然のように言われてきた。他の親たちと協力して、また学校の先生などからの協力も得て、作業所を作った。今は、これから先を考えている。親の近い所に、障害の重い人が暮らすグループホームを、みんなと協力して作りたい。（自閉症者の母親）
- ・様々な会や組織の相互乗り入れ的な会を作り、地域支援上何が大切かを一緒に明確化していく必要があるのでは。（保健婦の免許を持つ短大教員。姉の子どもに重度の障害。）
- ・障害児である前に一人の人間として、その個性が大切にされつつ地域の中で育っていくには、親ももっと自分の子どものことを周りの人たちに知ってもらおう努力をすることが必要なのは。（ダウン症の幼児を持つ母親）
- ・おもちゃ図書館も開設しているが、子どもたちの学校卒業後が心配。卒業後も楽しく集える場所がほしい。（難聴幼児通園施設職員）
- ・自閉症児者の地域生活が質的に向上することに役立てばと、月1回、学生ボランティアの応援を得て、レジャーや社会的スキルの学習の機会を地域で設けているが（スペースクラブ）、彼らと他の障害者や一般の人たちとの横のつながりが課題である。（児童相談所職員）
- ・親御さんをはじめ、多くの立場の人の声を聞いていきたい。それらを市の福祉行政に活かしていきたい。（市役所社会福祉課職員）

2. 組織の明確化（イメージ作り）

「地域支援を考える集い」の後に同様の会を再開し、さらに有志による準備会を重ねていき、以下のような形で組織を立ち上げることにした。

- (1) 名称
障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク
- (2) 目的
障害児者が、地域の中で、家族を含む多くの人たちと

豊かな人間関係を結びながら充実した社会生活及び人生を築いていけるためにはどのような支援が必要なのか、また可能なのかを、障害児者・家族・支援者・専門家など様々な立場の人が互いの実践や経験を交流しつつ、一緒に学ぶ。さらに、地域福祉の充実に参加し、かつ障害児者に対する一般の人たちの理解が深められるような活動を実施する。

(3) 目指す活動

- a. 会員間の実践交流。
- b. 障害児者の地域福祉及びその関連領域（医療・保健・教育等）の現状と課題に関する学習。
- c. 障害児者の地域福祉への支援。
- d. 障害児者とその家族の生活、障害児者へのバリアー等に関する実態調査。
- e. 障害児者とその家族からの相談への対応。
- f. 障害児者とその家族、支援者、専門家、一般の人たちなど、様々な人たちの出会いと連携作りを寄与するイベントを開催する（年一回程度）。
- g. 一般の人たちへの情報発信。例えば、秋田市ないし秋田県のとりわけ民間レベルの活動を紹介でき、またそれに携わる人たちの思いを理解してもらえるような本かパンフレットを作る。

なお、以上のうち当面は実践交流や学習会を重視することとし、それらをどのように進めていけばよいか（内容面も含めて）とか、それら以外の活動もできるかといった点については、本ネットワークを立ち上げ活動を実際に重ねる中で入会者の意見や要望を聞いたり世話人にかかる負担の大きさを秤にかけたりしながら、検討していくことにした。

(4) 世話人会

世話人会（12名）の中から、本ネットワークの代表（筆者）と副代表が選出され、他の人たちも世話人代表（1名）、会計（2名）、記録（2名）、広報（3名）、アドバイザー（2名）を担当することとした。12名中5名は障害児者の母親であり、ダウン症児をもつ家族の会である「コロボックルの会」、種々の障害の子どもと家族、ボランティアから成る「秋田すずめの会」、重症心身障害児者の親の会である「重症心身障害児者を守る会」といった親の会の設立・運営に、積極的に関わっている。他は大学や短期大学や養護学校の教員、難聴幼児通園施設職員、知的障害者入所更生施設職員などの職にある。各自が、勤務外の時間を利用して、親の会や通所施設などでボランティア活動を行っている。

(5) 入会資格

参加資格は特に設けず、障害者本人やボランティア志願者を含めてどのような立場であろうと、また秋田市内・

市外を問わずどこに住んでいようと、障害児者の地域生活支援に関心のある人や実際に関わっている人ならば入会可能とした。入会の希望は学習会開催時を中心に募り、会費は年間1,000円とした。

なお、世話人の任期や選出法などをも含む本ネットワークの規約は前もって定めず、2、3年間の活動状況を踏まえて検討することとした。

Ⅲ 「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の活動について

1. これまでの活動の概要（2000年11月現在まで）

現在までの本ネットワークの主な活動は、拡大学習会（非会員にも広く参加を呼びかける）、会員学習会（会員中心）、小旅行、会報発行に大きく分けられる。以下にはその詳細が記されている。

*「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の活動（1997年3月～2000年11月）

《1997年（平成9年）》

- ・3月23日（日）
ネットワーク発足記念拡大学習会（秋田大学）「輝いて生きる～障害のある人たちの豊かな地域生活を求めて～」①講演 中野文子（自閉症療育施設南材ホーム所長・宮城県自閉症児者親の会仙台支部長）②座談会「秋田における地域支援に向けて」小林錦（やすらぎの家ボランティア）／撰津良二（バクの家、竹生寮）③活動紹介（バザー、パンフレット）
- ・6月7日（土）
ネットワーク第1回会員学習会（秋田大学）「様々な取り組みの紹介と提言」・小規模作業所から（いなほ会・斉藤好行）・障害者団体から（車いす連合会・阿部秀一）・精神障害の方の作業所から（秋田あすなろ会・宇佐美泰雄）
- ・11月8日（土）
ネットワーク第2回会員学習会（秋田大学）「幼児期の育ちを支えるために」・就学前療育施設の立場から（グリーンローズ・片桐貞子）・保護者の立場から（三浦純子／乳井恒雄）
- ・12月4日（木）平成9年度忘年会

《1998年（平成10年）》

- ・3月22日（日）
ネットワーク第2回拡大学習会（秋田県生涯学習センター）「輝いて生きる'98～ともに楽しく元気よく～」①講演 山下佳子（埼玉県川口市めだかふぁみりい代表）／長尾麻子（めだかふぁみりい・地域生活コーディネーター）②活動紹介（ハンドベル演奏、バザー、パンフレット）
- ・6月27日（土）
ネットワーク第3回会員学習会（秋田大学）「地域生活支援のために～制度を中心に～」斉藤雅和（竹生寮地域支援事業コーディネーター）／松本研二（東山学園・前地域支援事業コーディネーター）
- ・10月24日（土）
ミニ旅行（はーとふるツアー）「(リゾートしらかみで行く) 秋田-深浦はーとふるツアー」
- ・11月13日（金）
ネットワーク第4回会員学習会（兼・忘年会）「重症心身障

害児を守る会の取り組みについて」加藤紀彦（秋田県重症心身障害児者を守る会会長）

《1999年（平成11年）》

- ・ 3月13日（土）
ネットワーク第3回拡大学習会（秋田市民文化会館）「輝いて生きる'99～これからの地域生活支援を考える～」①講演 松友了（全日本手をつなぐ育成会・常務理事他）②活動紹介（作品展示、パンフレット、音楽演奏）
- ・ 6月26日（土）
ネットワーク第5回会員学習会（秋田大学）「地域の中で夢をかたちに」宮崎洋（小規模作業所・くだけ寮）の取り組み／庄司恵子 飲食店「このゆびとまれをワンステップとして」
- ・ 9月25日（土）
ミニ旅行（第2回は一とふるツアー）「（リゾートしらかみで行く）秋田 - 深浦は一とふるツアー」
- ・ 11月12日（金）懇親会

《2000年（平成12年）》

- ・ 3月19日（日）
ネットワーク第4回講演&交流会（拡大学習会改め）（秋田県生涯学習センター）「輝いて生きる2000～こんな生活、できたらいいな～」①講演 内藤由美（台東区身障児者を守る父母の会会長）②活動紹介・意見交流
- ・ 6月24日（土）
ネットワーク第5回会員学習会（秋田大学）工藤正悦（ふっとワーク）／鎌田礼子（横手市通園療育事業「モモの家」）
- ・ 9月17日（日）
ミニ旅行（第3回は一とふるツアー）「（バスで行く）秋田・尾去沢メインランドは一とふるツアー」
- ・ 11月17日（金）情報交換&懇親会

（その他）会報の発行（No.1～13）

2. 拡大学習会

学習会には「拡大学習会（平成12年より、講演&交流会に改称）」と「会員学習会」とがある。親が安心して学習会に参加できるためには託児の場が欠かせないが、それは学習会の場所内に設けられ、会員外のボランティア（大学生、幼稚園教諭、地域のボランティア団体など）の協力を得て行われている。

拡大学習会では、県外において先進的な地域生活支援活動を実践している人を講師に招いて地域生活支援の理念や動向を学ぶことを主たる目的とし、教育や福祉関連諸機関へのチラシやポスターの配布、新聞等への記事掲載を通して、一般市民も含めて会員外の人の参加も広く呼びかけている。また、拡大学習会を、多くの人に県内の障害児者やその関係者の様々な取り組みを知ってもらおう好機としても位置づけ、障害者の作品や製品とか、親の会や通所作業所、入所施設などの紹介パネルを、会場の内外に展示している。さらに、講演に入る前のセレモニーに、障害者の音楽演奏を含めている。なお参加費は、講師への謝礼、旅費等に当てるため、会員・非会員を問わず有料。

まず1997年3月に、本ネットワークを立ち上げるべく発足記念拡大学習会を開催したが、その際、参加者には以下のような紹介文が配られた。

*「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」の紹介文

本ネットワークは、障害のある人たちが豊かな地域生活を送れることを願って行動している人たちにより、「横のつながりがあればいいな」という共通の思いを実現させるべく結成されました。施設職員、教員、障害のある方、家族、ボランティアなど、様々な立場の方が会員になっています。

- ・それぞれの実践や経験、思い、情報を立場を超えてわかち合っていきましょう。
- ・協力してやれそうなことに挑戦していきましょう。
- ・ネットワークでの出合いをきっかけとして、それぞれの日常生活や実践上も、協力し合っていきましょう。
- ・障害のある人たちの地域生活支援のあり方を考え、行動に移しつつ、会員自身の地域生活もより豊かなものにしていきましょう。

*本ネットワークの会費は、年間1,000円です。入会希望の方は、学習会等、本ネットワーク主催の行事の際に申し出てください。あるいは電話にて、代表までご一報ください。

*本ネットワークの活動等についてご意見や提案がありましたら、お気軽にお寄せ下さい。また、秋田市内外を問わず、各地での取り組み（親の会、本人活動、ボランティア活動 etc）を紹介して下さるようお願いいたします。本ネットワークの活動へボランティア参加して下さる方も、代表までご連絡下さい。

（1997年3月23日「ネットワーク発足記念拡大学習会」参加者配付資料より）

この発足記念拡大学習会には150名を超える予想以上の参加者があり、障害児者の地域生活支援、及び支援のためのネットワーク作りに関して、多くの人が関心を寄せていることが痛感せられた。

参加者には、会に参加した感想、会で今後取り上げてほしいテーマや会への要望、本ネットワークの今後に向けての提言や要望についてアンケートしたが、まず感想として以下のようなものが寄せられている（学習会の中で行われた講演そのものへの感想は除く）。すなわち、その内容はおおむね好意的であり、ネットワークに対して大きな期待や希望を抱いた、障害児者へ関わる様々な立場の人の存在を知った、立場を超えた横のつながりの大切さを知った、等の感想が寄せられている。

*発足記念拡大学習会（1997年3月23日）への感想

- ・色々な立場の方の話が聞けて、大変有意義であった。
- ・ネットワークに対して大きな期待をもった。非常に広い範囲にわたるネットワークでまだよく見えないところもあるが、何でもやっというということにとっても感じ入りました。
- ・他の親の会がどんな活動をしているのか知ることができて、参考になった。記録に残すことの大切さをあらためて感じた。
- ・他の参加者との間に距離を感じないで参加ができた。また、

障害児に対して支援者がたくさんいることを知った。

- ・今後必要とされているものは、このような会だと思う。専門職や保護者以外の一般の方にも参加してもらえるようになってくれればよいと思う。
- ・福祉の一分野での関わりだけだったので、様々な視点からの意見や集まりに参加できたことは、今後に向けてのステップになった。
- ・たくさんの人が集まり感激。このようなネットワークをより確かなものに育てていきたいと思う。
- ・秋田にも色々な人がいるんだと見えてきた。
- ・ネットワークのようなものがないものだろうかといつも思っていたので、希望を感じた。何事も踏み出さないと進まないのだと、痛感させられた。
- ・「横のつながり」を各方面からの意見や感想を聞き、とてもよい機会だったと思う。時間があればと思う反面、一歩ずつ試行錯誤しながらでも協力していければと思う。

次に、拡大学習会やそれ以外の学習会で今後取り上げてほしいテーマや会への要望としては、以下のような内容となっている。通所作業所やグループホームなど、障害者のとりわけ学校卒業後の地域生活・ノーマライゼーションに欠かせない就労や生活の場についての情報を期待する声と比較的多いが、他にも、行政側からの情報を期待する声、個々の障害（自閉症など）についての情報を求める声なども認められる。

* 今後の拡大学習会等への要望等

- ・養護学校の親たちにたくさん参加してほしい。
- ・行政の方の話を聞く機会があればよい。ボランティアをしてくださる方の話も聞きたい。
- ・行政に対する意見交換の場を作ってほしい。
- ・障害者が普通に町で暮らしていけるように町の中に作業所、グループホームが作られればよい。そのことに向けて知識のある方。
- ・色々な障害をもっている人たちが集まって作業所を運営している人の話を聞いてみたい。
- ・普通教育の中に障害児教育を取り入れる提案や実践。
- ・小規模作業所を新しく計画するとき、どのような困難があるか、あるいは公的補助の内容など、これらに関して全く素人の若い世代の障害者の父兄に対して、情報を教えてほしい。
- ・作業所の状況や一般就労した場合の問題点などを聞きたい。
- ・県外では同様の活動としてどんなことをしているか、紹介するような内容がよい。
- ・福祉に関心を持つ企業の経営者など。
- ・親の側からは子どもの病気の話を詳しく聞きたいと思っているはずなので、自閉ならそのことにもっと焦点を絞ってもらえるとよい。
- ・高等部教育のあり方。
- ・学校生活で問題が生じたとき、どのようにしたらいいのか（行動面や学習など）。
- ・市内、県内の支えるための機関など、また各施設で抱える問題等についての情報提供。
- ・色々な施設の方のお話。在宅で重度の障害者を抱え、上手に地域の人と関わっている親の話。
- ・レスパイトのこと、学童期、生徒期の放課後の生活の充実のためのアンケートや障害児学童保育の開始。
- ・当事者からの生の声、どういふことを望み、どのようにした

いのかを聞きたい。

- ・精神障害者の問題。北欧の先進的な福祉（精神病院をなくす法を制定した）やその歴史。
- ・重度障害児の卒業後の進路、障害児者が安心してかかることのできる病院を是非設立してほしい。親が毎日行える訓練法。卒業後子どもが地域に戻った時、自然に生活できるように、普通学校とのつながりを持ち、地域の人たちに知ってもらいたい。
- ・企業就労の可能性。ネットワーク活動の先進地の報告。
- ・学習障害児について取り上げてほしい。
- ・現在秋田県内で通所作業所で尽力されている方の苦労話等、経験談（生の声）を聞きたい。
- ・障害者の高齢化の問題や入所施設の問題等について、テーマを設けてほしい。
- ・グループホームや通勤寮のことをもっと詳しく聞きたい。
- ・自閉症、多動児のお母さんの話などを聞きたい。
- ・行政側の人を交えた学習会。

なお、拡大学習会はこれまで4回開催されているが、託児ボランティア（大学生や専門学校生など約30名）の協力により障害児をもつ親の参加への配慮や便宜が図られていることもあり、どの回にも120名程が参加している（実行委員、託児ボランティアを除く）。本人や親というにとどまらず参加者の立場は多様であるが、ちなみに第4回（平成12年3月）への参加者が関係している団体は以下の通りである。

・知的障害者通所施設

工房コスモス、ふっとワーク、つどいの家、杉の木園、やすらぎの家、保戸野授産所、くだかけ寮、いなほ会福祉作業所、つくしんぼ、仙北東部ふれあいデイセンター

・親の会

全国心臓病を守る会、そよ風親の会、秋田すずめの会、秋田県重症心身障害児（者）を守る会、コロボックルゆりねの会、秋田県LD児者親の会（アインシュタイン）、コロボックルの会、ひまわりの会、台東区身障児者を守る父母の会

・通園施設

モモの家、グリーンローズオリブ園

・本人の会

秋田県車イス連合

・ボランティア団体

たんぼぼの会、向日葵の会、バクの家

・その他

特殊教育諸学校（養護学校）、通常学校、大学、短期大学、専門学校、幼稚園、保育所、入所型更生施設、療護施設、等

3. 会員学習会

話題提供者の話を踏まえて、主として会員間で（会員外の参加も可）秋田県内における種々の立場での実践や

問題、課題等を語り合うものである。これまで5回開催しているが、会員の立場やニーズの多様さを考慮しているため、各回のテーマも作業所関連、就学前の療育関連、地域生活支援に関わる制度関連、親の会関連などと、広範に及んでいる。

学習会は、本県、あるいはより身近な地域の中で、どういう人たちが、どういう立場で、どういう思いで地域生活支援に関わる実践を行っているのか、またどういう困難を抱えているのかについて知り合える機会として、さらに同じ立場同士で、また立場の違いを超えて、どういう形で支援し合えるのかについて考え合う機会として、貴重なものと言えよう。

また親、とりわけ若い障害児をもつ親や、他県から引越してきて間もない親にとっては、日頃の相談相手となってくれる親や専門家と出会える場となっている。

4. ミニ旅行（はーとふるツアー）

一緒に楽しく過ごす機会をもち会員同士で懇親を深めることも、地域の中での自然な相互支援を長きに渡って深化・継続させていく上で欠かせないのではないかと、との世話人達の総意により、行われることになったものである。

ネットワークの会員やその家族（障害児者を含む）を中心に40名ほどの参加希望者を募り、秋田駅より観光用の特別仕様の列車（リゾートしらかみ）で隣の青森県の深浦町に日帰り旅行をしている（片道2時間半）。一般客も乗り合わせるが、少なくとも一両は貸し切り状態となる。深浦町からの懇切丁寧な支援もあり（深浦駅から休息所までの移動や町内観光のための福祉バス及び運転手の提供、バスガイド役の役場職員の派遣等）、列車の中だけでなく休息所やバス内においても、楽しくくつろいだひとときが得られている。

事前の下調べや関係者（町役場やJRの職員など）との打ち合わせなど、拡大学習会と同様に世話人の負担は少なくないが、この旅行についてはとりたてて「ボランティア」を用意せず、旅行のプロセスで参加者同士の間で自然に助け合いが生まれることを大切にしている（あなたも私もボランティア）。こうして、知的障害のある女性が車椅子を押してくれたり、普段は我が子への他人からの支援を経験することの多い父親が世話人と一緒に障害の重い人の車椅子を階段で運ぶ、といった場面を多く見ることができる。ともあれこのミニ旅行には、以下のような点も含めて、多くの意義があると推察される。

・障害が重い、車椅子を使用せざるを得ない、親自身が健康に不安がある、等の事情により、普段外出そのものの機会が少なかったり、自家用車以外の乗り物での移動

（旅行）経験が乏しい障害者にとり、社会参加、社会体験、仲間作りの機会をもたらしている。

・「楽しく安全な旅行を低価格で」という具体的な目的を実現すべく福祉の制度（例えば、交通費の障害者割引制度）や施設（例えば駅：ホームへの移動、列車の乗降等を含む）、交通機関（例えば列車：列車内での車椅子による移動、トイレの使用等）を実際に使用することにより、制度の活用の仕方や活用上の工夫、制度の課題、バリアフリーの現状や課題を学べる。

なお、旅行の準備段階から終了するまでのプロセスで交通公社職員、駅員、町役場職員、一般の旅客など多くの人と関わりを持つが、それらは自然な福祉教育（いわゆる社会啓発）の機会となっているだろう。もちろん個々の参加会員にとっても、人や場面・状況に応じた援助の仕方や工夫を実践を通して学べる好機となっている。

旅行時には簡単なアンケートもとられているが、旅行の今後の継続や拡大（例えば、より多くの人で行きたい、ディズニーランドなど遠くへ行きたい）を求める声が多い。また、2回のいずれの旅行についても、深浦町のきめ細やかな対応と親切に対して親を含む多くの参加者が謝意を表しており、「出会う人」「支援する人」のあり方の大切さが痛感せられる。なお第3回のミニ旅行（写真参照。2000年9月）では、バスを利用し、鉾山跡地を活かした観光地の尾去沢マインランドに行っている。



5. 会報について

会員向け会報は、これまで13号まで発行されている。内容は、拡大学習会や会員向け学習会といった本ネットワークの諸活動の報告と案内、関連著書の紹介、本県における障害児者関連行事の紹介、本ネットワーク会員による自己紹介や会員からのメッセージ、会員が所属する団体（例えば親の会）の紹介等である。会員同士の相互理解を深める上で、また、種々の理由によりネットワークの活動になかなか参加できずにいる会員への情報提供という意味で、会報の果たす役割は大きい。

IV 「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」のこれから

1. 本ネットワークへの期待

本ネットワークは、障害児者の親、親でありかつ親の会のリーダー、施設や作業所の職員、養護学校教諭、大学教員、日頃ボランティアを行っている人など様々な立場の人が、障害者本人の参加も歓迎しつつ、立場の違いを超えた対等な関係で、それぞれの立場の独自性や専門性、それぞれの立場での経験も活かし合いつつ、上記のような活動を試みてきた。ちなみに、それらの活動の中で得られる様々な情報、様々な立場の人の実践や考え、経験は、普段のそれぞれの立場・持ち場での実践にとってもきわめて有益なものであろう。これまでの4回の拡大学習会の際には必ずアンケートがとられているが、本ネットワークに望むこととしては、以下のように学習、実践や意見の交流、情報提供、支援者（ボランティア）への支援、問題解決、イベント、啓発、その他、として分類しうる回答が寄せられている。

①学習

- ・年に2, 3回学習会をやってもらいたい。
- ・年に数回の学習会の開催。参加できなかった人への資料の送付。
- ・海外（欧米や途上国）の活動事例の学習。

②実践や意見の交流

- ・今回色々な職種、職場の人が集まった。そこで実際はどのようなことをしているのか、見学やビデオ紹介することで各人がそれを利用し、発展していくことが必要ではないか。
- ・県内の各グループはどんな活動をしているのか紹介しあい、ネットワークとしてどんな活動が必要なのかを、検討してはどうか。
- ・1年間通所施設や同じ病気の子の会などに参加したが、その日のスケジュールやイベントなどで親同士の生の声がなかなか聞こえてこない。育てている者の生の声をもっと意見交換できる場や時間をどこの会でももっと受け入れてくれれば、ともすれば孤立してしまいがちな障害児の親にとってはありがたい。
- ・各会との交流会
- ・もっと色々な人の現在抱えている問題や活動などを知りたい。
- ・いろいろな方の情報交換。横のつながりの大切さを痛感した。

③情報提供

- ・県内の関連する団体の活動紹介（秋田市以外での活動を知りたい）。
- ・ボランティアの活動で協力がどんな範囲までしてもらえるか、家庭への派遣はしてもらえるかなど知りたい。
- ・秋田の各グループ（会）の活動を会の方から紹介してもらいたい。
- ・情報の提供。

④支援者（ボランティア）への支援

- ・各ボランティアグループのネットワーク（話し合いの場）
- ・支援者やボランティアが増えるよう、また育つように。

⑤問題解決

- ・学童期の子ども達の放課後の過ごし方についての実態調査と、その結果を基に放課後児童館などで親がついていなくても楽しく地域の子も達と過ごせるように援助してほしい。
- ・行政への働きかけ。重複障害の方が通所する施設であれば、重度加算などの要望。職員に対しての制度、保険加入などの充実。
- ・行政に働きかける活動
- ・各団体の共通する問題（卒業後のこと、レスパイトのことなど）が良い方向へ行くように、大筋のことができるようになってほしい。
- ・学校が終わってからや、学校の長期休みの時に、自由に気軽に遊びに行ったり預かってもらったりする場があればいいと思う。
- ・親が死んでも安心して生活していけるような施設などを作っていたideきたい。

⑥イベント

- ・コンサートの開催。
- ・ミニ旅行やお花見、キャンプなどをしてほしい。
- ・気軽に参加できる、ゲームやフォークダンスなどを楽しむ会など。

⑦啓発

- ・一般の方々に積極的に存在をアピールし協力を得る（マスコミへの働きかけなど）
- ・地域の人に障害児のことや様々な会のことを理解してもらえよう運動をしていただきたい。
- ・町内会への会報の回覧。
- ・テレビやラジオでネットワークの存在や活動を伝えてもらう。
- ・作品展示や販売コーナーを大衆に触れやすい場所に設け、徐々に「ともに生きる」ことを理解してもらおう。
- ・各団体の活動を広く地域の人々に知っていただく機会を作る。

⑧その他（ネットワークの方向性）

- ・盲、聾の人たち、精神障害者、他の色々な障害者は、仲間に入れないのか。何をするにも全部の障害者を包み込む心がなければ市民（県民）の快い賛同は得られないと思う。
- ・市内だけではなく、県内に広がってほしい。
- ・差別・偏見は親近者に結構多いことを直視し、焦らない急がない活動を根幹にしてください。
- ・秋田市でのネットワークをまず確立し、いずれはそこから周辺市町村、県南、県北へと、広げていっていただきたい。県内での地域生活支援の先進地として活動していただきたい。

2. 本ネットワークのこれから

(1) 学習、実践や意見の交流、情報提供、イベントについて

普段、それぞれの持ち場で支援に関わる活動をしている本ネットワークの世話人たちは、いずれも多忙であり、その立場の違いは世話人会の開催日の設定の難しさの一因となっている。したがって、上記の様々な期待のすべてに即座に対応することは困難である。発足後のこれまでの間に築きあげられつつある本ネットワークの活動の柱、すなわち学習（学習会）、実践や意見の交流（学習会、会報）、情報提供（学習会、会報）、イベント（ミニ

旅行)を今後も継続・充実させていくことがまず大切なことであろう。

ちなみに、世話人のみならず会員全体の多様さは、「豊富な、そして生活に密着した情報源」や「相手の立場にたったの、相談への対応機能」を本ネットワークが潜在的に有していることを意味しており、本ネットワークのホームページの開設などで情報提供の可能性をさらに広げていくことが必要であろう。

(2) 支援者(ボランティア)への支援

本県においては、障害者の地域生活支援に関わるボランティアやその団体はまだまだ少なく、その横のつながりにも欠けている。障害児者やその団体と継続的に関わってくれ、またその積み重ねによりボランティアの域を超えて障害児者にとっての「友達」になれるようにボランティアを支援することも、本ネットワークで可能な一つの機能であろう。

(3) 啓発

ミニ旅行や拡大学習会なども啓発的な意義を有しているが、関連して感じることは、拡大学習会の案内などに「一般の方も気軽に参加してください。ボランティアもしてください。」と記してあっても、一般の人たちにとって実際に参加することには、まだまだかなりの勇気を有するということである。筆者の方に、「本当に私のような何も知らない一般の者が参加していいですか」と確認の電話をよこす人もいるのである。一般の人たちにとって、障害者やその関係者との間のバリアはまだまだ高く厚いようである。ちなみに、その高い厚いバリアは、一般の人の側だけで作ってきたものではない。少し厳しい言い方かもしれないが、障害者やその関係者の側の閉鎖性も、一因をなしていると考えられる。一般の人たちが気軽に心と体に向けて参加できるような配慮をしつつ、本ネットワークの会員の多様性を生かしたユニークな啓発活動をこれから模索する必要がある。

(4) 問題解決

ネットワーク会員の中には、本ネットワークに対して、自分が抱える問題や悩みの直接的・具体的な解決を求め人もいる。一方、その依頼を受けて、日常的に多忙な世話人を中心として個々の問題の解決に向けて長期に渡って奔走することは、時間的にも体力的にもかなり困難である。会員の多様性(つまり本ネットワークへの期待やニーズの多様性)が本ネットワークの特徴であり、その活動を特定会員が当面する問題の解決に集中することは、本ネットワークの解体にも結びつきかねない。本ネットワークとしてできることは、問題を抱える本人が自律的・能動的にその解決に取り組もうとする際の関連情報の提供、学習会の場合の各種専門家(とりわけ行政関係者)の参加依頼などであろう。行政関係者も含めて互いに立

場の違う人同士が「非難し合ったり要求し合ったりする場」ではなく「互いに提言し合ったり助言し合ったりする場」として本ネットワークが機能したり理解されるように、今後図っていく必要がある。一方、拡大学習会とか会員学習会などの折りに会員や参加者から出された意見、切実な要望、問題(例えば人権に関わる問題)を、またミニ旅行の機会に気づいた問題(例えば、福祉制度や交通手段とか施設内のバリアフリーに関すること)を、行政側に報告・提示することは可能であり、その実現は急がなければならないだろう。

(5) ネットワークの方向性

ネットワークには、ネットの結び目の強まり(相互理解と相互支援)とともに、ネットの拡大が求められよう。本ネットワークの会員には秋田市以外の人もいるが、それら市外の会員を増やすことも視野に入れつつ、一方では各地での新たなネットワーク作りへの支援や、各地でできているネットワークとの連携を図ることも、重要であろう。

V おわりに

本稿では、賛同者を得て筆者が1997年3月に発足させた「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」について、その発足経緯、これまでの活動内容とその意義、及び今後の課題を中心に言及してきた。

本ネットワークの大きな特徴は、その会員の多様性にある。すなわち会員には、作業所や施設の職員、養護学校教諭、ボランティア、親の会や本人の会(例えば、車いす利用者の団体)のリーダーや会員、障害児者をもつ家族(親やきょうだい)、大学教員などがある。発足後3年半を経た現在、本ネットワークの活動として会員学習会、講演&交流会(拡大学習会改め)、ミニ旅行、会報発行が定着してきている。会員以外にも参加を呼びかけ、秋田県内外における障害児者の地域生活支援に関わる取り組みの現状と課題を学び合ってきている。家族や本人をも含む関係者の思いや期待も交流させてきている。

一方、ネットワークの様々な活動での出会いがきっかけとなり、仲間や相互支援の輪が広がりつつある。例えば複数の親の会によるバザーの共催や、通園施設とボランティア団体との新たな連携が生まれている。

また平成12年9月の第3回は一とふるツアーには、身体障害者療護施設に居住する青年の単独参加が初めてであった(同施設に勤務するネットワーク会員からの勧めによる)。このことは、施設入所者への地域生活支援、地域に開いた施設づくり、さらには施設のノーマライゼーションという大きな課題に対して、本ネットワークが寄与しうることを示唆するものである。社会福祉の理念面で

「施設型福祉」から「地域型福祉」へと大きな変動がなされつつあるとは言え、本県を含めて、現実的には「施設型福祉」が優位を占めている県は数多い。ネットワークの網の目に入所型の施設やその職員、居住者を含み込んでいくことは、ネットワークを重視して地域生活支援を展開していこうとする際に、重要なことと思われる。

本ネットワークの会員は既に100名を越えている。会員の立場は多様であり、本ネットワークに対する期待の程度も内容も多様である。ネットワークへの帰属意識やスタンスも異なる。このような多様さを、障害児者の地域生活支援に向けてどのように活かしていけばよいのか、また世話人は「サービス（活動）を準備・提供する側」、その他の会員は「サービスを受ける側」といったどの地域団体にもありがちな構図を克服して、多くの会員が主体的かつ明確な帰属意識を持って本ネットワークに関わっていけるようにするためにはどのような運営が望ましいのか、等々、本ネットワークの課題は多い。

謝辞

会員学習会、ミニ旅行、会報発行、非会員を巻き込んだ講義&交流会といった活動が定着しつつある「障害児者の地域生活支援を考える秋田ネットワーク」は、筆者のみの力で運営されているものではない。お忙しい中にもかかわらずいつも準備の段階から活動を支えてくださっている多くの方々、特に知的障害者更生施設「竹生寮」の指導員である摂津良二さん、秋田大学医療短期大学の教員である佐々木真紀子さん、グリーンローズオリブ園の片桐貞子さん、県立栗田養護学校教諭の三浦英明さん、秋田すずめの会の渡辺禎子さんと佐藤厚子さん、そよ風親の会の田中陽子さん、コロボックルの会の三浦純子さん、重症心身障害（児）者を守る会の天童美智子

さん、身体障害者療護施設「ほくと」の指導員である木元政一さん、知的障害者更生施設「杉の木園」の佐藤敏明さんの御尽力に対して、この場を借りて心から感謝を申し上げます。

付記

本論文は、本ネットワークが2000年3月19日に開催した第4回講演&交流会の報告書「こんな生活、できたらいいな」の中で筆者が著したものを加筆・修正したものである。

文献

1. ベンクト・ニイリエ(1999) 障害者福祉を支える理念—社会変革としてのノーマライゼーション—. 社会福祉研究, 第74号, 12-18.
2. 伊藤則博(1999)「地域で生きる」ことを支援する. 教育と医学, 47(12), 2-3.
3. 熊谷公明(1998) 地域ネットワークの構築のために—加齢と高齢に伴う諸問題を巡って—. 発達障害研究, 20, 31-37.
4. 2000年1月19日秋田さきがけ朝刊
5. 吉武清実・菅井邦明・村井憲男他(1998) 広域高速ネットワークを活用した地域精神保健・障害福祉領域でのソーシャルサポートシステムづくり—コミュニティ心理学的アプローチ—. 東北大学教育学部研究年報, 第46集, 165-190.
6. 今野和夫(1996) 地域における障害者への支援活動—秋田県の場合—. 秋田大学教育学部研究紀要教育科学, 第49集, 99-107.
7. 今野和夫(1994) 家族と支援者の連携—秋田すずめの会—. 養護学校の教育と展望, No.92,14-17.
8. 今野和夫・秋田すずめの会(1993) すずめの文集—障害児とともに生きる母親の手記—. 学苑社.